ＡＯ入試制度の試みと変革

—秋田県立大学のケース—

郭　偉宏，岡野　秀晴，斉藤大幸（秋田県立大学）

大学全入時代といわれている中，優秀な学生を確保するのが大学の至上課題である。近年多くの大学にアドミッションズ・オフィス（ＡＯ）選抜方法が導入され，新しい入試制度として定着されつつある。しかしながらＡＯ入試は統一したモデルがないことから各大学では独自の試みが実施されていることをふまえ，現行の教育制度に合うＡＯ入試の特性を明確にすることで今後のＡＯ入試の指針を与えることは急務である。本論は秋田県立大学におけるＡＯ入試に関する諸データをもとにこの問題を考察する。

１．はじめに

平成９年に中教審がアドミッションズ・オフィス（ＡＯ）方法による入学者選抜を提唱して以来，私立大学はもとより国公立大学にもＡＯ入試が導入される傾向にある。２００６年には国立大学の36.1%,公立大学の21.1%,私立大学の68.8%の大学でＡＯ入試が実施されている（望月　2007）。

ＡＯ入試制度はもともと欧米（主にアメリカ）で生まれた入試方法であり，機能的には（１）入学者選抜，すなわち高校の学業成績の評価(内申書、適性テストと小論文など)，（２）入試広報活動，（３）高校との連携，（４）高校や大学の教育活動の評価，入学選抜方法の効果の追跡調査などを行う。すなわち,ＡＯ入試では,学力を基準の第一にせず,資質や意欲を第一の基準にし，入学後その学部で伸びていく人物を選抜していこうというものである（阿部等　1999）。日本におけるＡＯ入試の選抜方法は大学によって多少違いがあるものの，基本的に学校長からの推薦を必要とせず,学力試験を課さない,書類審査,小論文，面接などによって受験生の能力・適性，目的意識，入学後の学習に対する意欲などを判定するものである。一見欧米のＡＯ入試とそれほど違わないが本質的に異なる。一番の違いはＡＯ入試志願者の学力をどう評価するか，ということである。本来，大学の入試制度はその国における小中高校の教育形態を基礎にしている。したがって，各大学におけるＡＯ入試はアメリカ型と異なることも，独自の試みを実施することも理解できる（Ｋei—Ｎet　2007)。これまで大学側が求める学生像（アドミッション・ポリシー）に合致する志願者を集めて選抜するために，多くの大学で様々な試みが実施されている（これに関する例が多くすべては列挙できないが，大作・南部　2006,中村・福島　2006,福島　2006 池田・鈴木・加茂　2006，藤原　2006などを参照されたい。また河野　2006のコメントーも参照)。しかし，組織対組織の保証（推薦書による推薦入学）もなくかつ個人対組織の保証（前期と後期の学力試験による入学）もないままＡＯ入試志願者の資質を見極めることは容易なことでない。このため成功例もいくつかあるが，今もなお模索中の大学も少なくない。

少子化が進み，全入時代といわれる大学を取り巻く環境は厳しくなり，ＡＯ入試を採用する大学はますます増える。現行の教育制度

に合うＡＯ入試の特性を明確にし，今後のＡＯ入試の指針を策定することは優秀な学生を確保するうえでどの大学にとっても急務である。本論の目的は秋田県立大学におけるＡＯ入試に関する諸データをもとにこの問題を考察することである。また，ここで提起する問題は多くの大学に共通し，考察から得た知見は共有できる可能性があると考えられる。

２．本学のＡＯ入試

本学は平成１４年度からＡＯ入試制度を実施しており，定員が少ないものの，これまで２０名近く学生を受け入れてきた。ＡＯ入試を導入したのはシステム科学技術学部の機械知能システム学科と電子情報システム学科の２学科である。定員は機械知能システム学科で４名（全募集人員８０名），電子情報システム学科で２名（全募集人員８０名）である。大学入試センター試験および個別学力検査を課さず、提出された論文、作品または自己推薦書の審査および面接により、「ものづくりに愛着を持ち、特定の分野に秀でた才能を有する人材」であるかどうかを総合的かつ多面的に評価し、判定する。入学者の選抜は以下の2段階選抜方法を採用する。

（１）第１次選抜

志願者は論文，作品または自己推薦書を作成し，提出する。機械知能システム学科に出願する場合は，表１の課題から１つ選んで２千字から４千字程度の論文を作成するか，模型，設計（企画書なども含む）などの作品と千字程度の内容説明書を作成する。なお，課題については毎年少しずつ変更していて，模型や設計については制限を設けていない。電子情報システム学科に出願する場合は，表１の指定分野から１項目を選択し，それに関して得意とする事項について８百字以内で自己推薦書を作成する。

（２）第２次選抜

第１次選抜合格者を対象とする面接を行い，最終合格者を決定する。面接の内容は各自が準備してきたスライド，ＯＨＰ，配布資料などを使用して１５分以内で説明し，発表内容について質疑応答を行う。このとき，機械知能システム学科においては，基礎学力（数学・物理）に関しても審査する。電子情報システム学科においては，電子情報システム学学習教育プログラム（ＪＡＢＥＥ認定)を学習するために必要な基礎知識・能力について審査する。

表１　本学ＡＯ入試の課題例（平成１９年度の場合）

機械知能システム学科	電子情報システム学科
・将来の自動車 ・身の回りの材料 ・風力エネルギーの利用 ・宇宙ステーションでの生活 ・ものづくりの科学 ・動植物運動の模倣 ・福祉と介護 ・屋外用ロボット ・２次元平面を運動する二つの棒状粒子の接触条件	・電子システム分野（物理・電磁気現象、電気機械、電磁波(電波)) ・情報処理分野（数学、電子計算機、計算手法、プログラミング) ・情報システム分野（音響現象、情報ネットワーク、画像処理) ・電子デバイスシステム分野（量子力学、光現象、電子物理、電子回路)

表２　本学におけるＡＯ入試状況

		14 年度	15 年度	16 年度	17 年度	18 年度
機械知能システム学科（定員４名）	志願者	4	9	10	6	4
	合格者	1	4	4	3	2
電子情報システム学科(定員２名)	志願者	6	3	9	6	6
	合格者	2	1	1	1	1

表２は平成１８年度までのＡＯ入試の志願者と合格者人数を表す。応募倍率（志願者数／定員数）は機械知能システム学科が 1.65 倍であり，電子情報システム学科が３倍であるのに対して，合格率（合格者数／志願者数）は機械知能システム学科が 0.42 であり，電子情報システム学科が 0.2 である。ここ数年定員割れの状態が続いている。合格率が低いのは面接時に志願者が基礎学力を備えていないと判断されたケースが多い。

このような２段階選抜（書類審査＋面接）方式が現在最もよく使われているＡＯ入試方法である。にもかかわらず，ＡＯ入試合格者に対する追跡調査を行った結果，本学が求めた学生像（アドミッション・ポリシー）とかけ離れた群れがそこに存在するという印象は強い。その結果，ＡＯ入試制度による合格者が年々少なくなり，制度自身の存続も問われている。

３．ＡＯ入試の評価

ＡＯ入試の評価は多面的に行われなければならないということから，統一した基準がまだない。ＡＯ入学者に対する期待度（こうなってほしいと希望する度合い）という角度から，(１) 優秀な高校生が受験すること；(２) 入学後の学業成績が良好であること；（３）大学院へ進学すること；（４）独創性・創造性を発揮することなどを見る例がある（池田・鈴木・加茂 2007）。大学ないし学部により事情が違うことから（３）については一概にいえないが，（１）、（２）と（４）については共通性があると考えられる。以下は秋田県立大学のＡＯ入試に関する諸データをもとに，（１）、（２）と（４）について考察する。

３．１．優秀な高校生が受験すること

ＡＯ入試には高校長からの推薦を必要としないが，高校の進路指導係と相談せずに受験する例はまれである。その結果，データで示すことはできないが２段階選抜においては，書類審査は高い点数を取ったものの，面接では非常に低い点数しか取れないといった逆転現象がしばしば起こっている。これは本学のＡＯ入試の合格者が減少している一因と思われる。しかし，高校側が優れた人材として正しく評価して責任をもって推薦できる生徒は 10 ％程度であり，さらに推薦する生徒の成績は同一校内ではある程度相対学力を示すが，異なる高校，異なる地域での比較はできないという指摘もある（阿部等　1999）。アメリカでは，高校での学力レベルを判定する全国統一試験があり，年数回実施されている。ＡＯ入試においては，この情報を大きな根拠として選抜している。それに対して日本では，現在の大学入試センター試験は１月に一回だけしか実施されていない。本学のＡＯ入試合格発表は１０月であるため，合格者の学力判定として使えない。以上のことを考えるとＡＯ入試の受験生が優秀であるかどうか（大学

の課程について行けるか）を客観的に判断することはＡＯ入試の一番の難点であり，幾つかの試みがあるものの(たとえば,望月　2007,島田　2007など），残念ながら未だ解決策が得られていない。注意すべき点はこの問題が日本の独特な問題であり，日本の教育制度をふまえて解決しなければならないことと，地域や大学の差があることから回答が一つとは限らないことである。

3．2．入学後の学業成績が良好であること

入試制度の評価は入学後の成績も重要である（倉元・奥野　2006，菊地　2006，藤原　2007）。本学において，成績評価はＧＰＡ(Grade Point Average)で行われているため，ＡＯ入試合格者の成績追跡調査も基本的にＧＰＡにより行う。図１と図２は機械知能システム学科と電子情報システム学科のＡＯ入試合格者の成績を表す。図１と図２において，学科全体の成績平均値とバラツキ(標準偏差)を合わせて表す。ＡＯ入試合格者の成績は●と◆で表し，●は成績平均値付近にある((平均値±標準偏差）以内）ことを意味し，◆は成績平均値からかけ離れている（平均値±標準偏差）以外）ことを意味する。

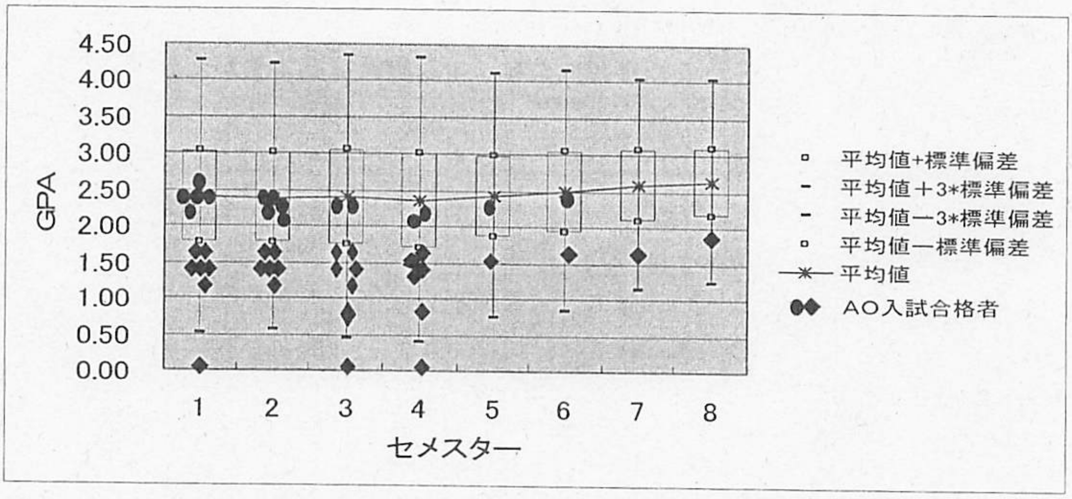

図１　機械知能システム学科におけるＡＯ入試合格者の成績追跡調査

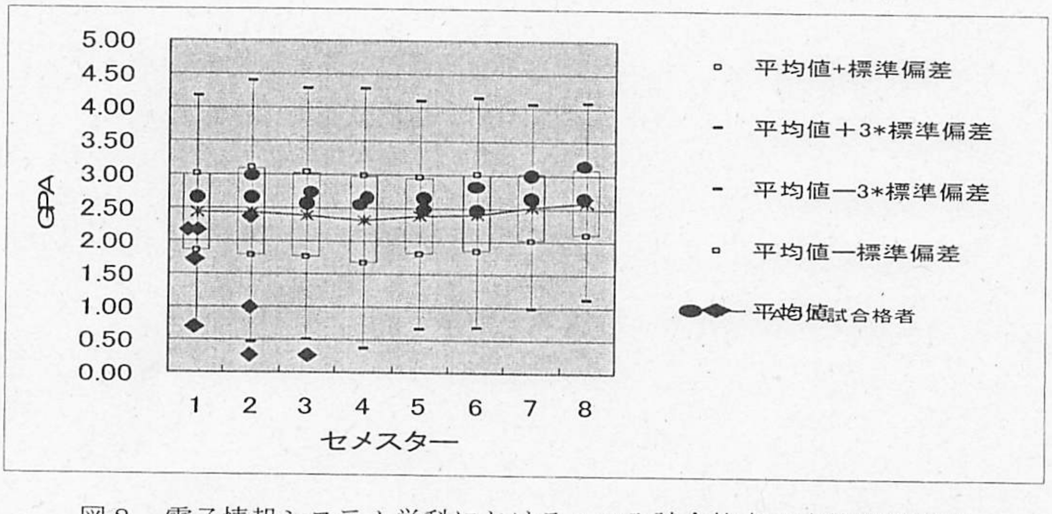

図２　電子情報システム学科におけるＡＯ入試合格者の成績追跡調査

図１から分かるように，機械知能システム学科において平成１７年度以前に入学したＡＯ入試合格者１２名中，平均成績付近に留まるのはわずか１名であり，逆に平均成績をはるかに下回る者が７名おり，うち退学１名、留年３名に上る。図２から分かるように，電子情報システム学科においても平成１７年度以前に入学したＡＯ入試合格者５名中，１名が本学大学院に進学した（優秀な学生）反面，２名はすでに退学している。両学科を通じてＡＯ入試合格者の成績が低迷しているといえよう。その原因については議論を重ねた結果，以下のように思われる：

① 一芸に秀でたものを選抜する趣旨のため、高校での成績が低い生徒が合格する可能性がある。
② 推薦が必要ないので高校側から学力の低い生徒をＡＯ入試に送り込む傾向がある。最近ＡＯ入試は大学全体に普及する感があり，高校側で様々な対策をとることでかえって生徒学生本来の姿が隠される恐れがある。
③ 本学に入学後、他選抜の学生と同じカリキュラムで授業を受けさせ，ＡＯ入試合格者に対して入学後特別なフォローアップをしなかった。このため，ＡＯ入試合格者は入学後成績不振に陥って退学する例がある。

すなわち，現行のＡＯ入試方法は優秀な高校生を判別する手段として不十分であり，改革する必要がある。一方，学力の低い学生を取ってしまった以上（この状況が現実であると思われる），何らかの形でフォローアップする必要がある。このような状況はＡＯ入試を採用する多くの大学に存在すると思われる。したがって，追跡調査はすべてのＡＯ入試合格者に対して行わなければ偏った結論に達する恐れがある。

３．３．独創性・創造性を発揮すること

ＡＯ入試合格者は本来一芸に秀でたものであるはずだから，その独創性を発揮する場があれば参加するだろうと思われる。本学には学生自主研究という制度がある。それは１年生と２年生を対象とし，自ら研究テーマを見つけて申請し，許可されれば大学から研究費が支給される，このことにより学生の勉学意欲を高める制度である。この制度は学生の間に浸透し，年々申請件数が増えている。したがって自主研究に参加することは学校での勉学と研究に溶け込めているかどうかのバロメーターの一つとなっている。この制度はＡＯ入試本来の意味においてその目的に合致したものであるため，ＡＯ入試合格者の参加状況を調べた。現状は表３に示したとおりである。

表３　ＡＯ入試合格者が参加した自主研究題目

年度	機械知能システム学科 （学科の件数／学部の総件数）	電子情報システム学科 （学科の件数／学部の総件数）
H14		サッカーロボットの製作とその制御に関する基礎研究（5／21）
H15	なまはげジャンケンロボットの研究(7／21)	
H16	歩行ロボットに関する研究(16／34)	
H17	自動車用制御装置の仕組みと応用に関する研究(17／41)	
H18		ウェブ情報システムの研究(10／56)

表３から分かるように，機械知能システム学科のＡＯ入試合格者１４名中３名が自主研究に参加した（グループに参加したものの，目立った貢献がなかった)。電子情報システム学科のＡＯ入試合格者６名中２名が自主研究に参加した（2名ともリーダー役である)。また，表３にその年度に申請した学科の件数と学部の総件数を合わせて表す。これによると数値的な評価は難しいがＡＯ入試合格者が積極的に自主研究に参加しているとはいいがたい。注意すべきなのは，学生自主研究制度が独創性発揮の場を提供はしたものの，ＡＯ合格者の学力のフォローアップになっていないことである。

４．ＡＯ入試の改革

このように本学のＡＯ入試が岐路に立たされている。従来の２段階選抜方法に限度があり，改革しなければＡＯ入試が継続することが出来ない状態になっている。そこで従来のＡＯ入試方法を改めて，以下の改革を行うことを提唱する。

（1）「座して待つ」から「外へ出る」へ

これまで試験期間を決めて公表することにより学生を募集した。これを改めて，高校側と密接な連携を構築し，意欲と能力のある優秀な高校生を確保するために積極的に外へ出て優秀な学生を発掘する活動を行う。そのために以下の活動を行う。

① 高校のみでなく中学校ないし小学校に対しても出前講義を行い，学習意欲の向上と本学に入学したい感情を育てていく。特にキャンパスの所在地である由利本荘市は18年度から科学技術振興機構の「理数大好きモデル地域事業」に選ばれたことを追い風とし，地域密着型の人材育成に取り組む。

② オープンキャンパス，高大連携事業など従来のイベントの中でプレゼンテーションを工夫し，高校生の入学意欲を高める。

③ 高校の先生方と定期的に意見交換を行い，優秀な生徒の情報をいち早く把握し，当該生徒と直接対話する機会を作る。

④ 優秀な学生に対してインセンティブを与える制度を設け，高校側に働きかける。例えば「特待生制度」を適用して授業料相当額を給付する。

（2）「合格すればよい」から「合格したらどうする」へ

これまでＡＯ入試の合格発表は１０月であるため，いったん合格すればその後のフォローアップはどうしてもおろそかになる嫌いがある。大学側はこれまで数学や物理などの科目について，課題の添削やスクーリングなど対策を採っていたが，万全とはいえない。そのために以下の方策を実施する。

① ＡＯ入試合格者の学力を確保するため，科目を限定して（例えば数学・物理・英語３科目）センター試験を受けさせる。学校が設けた基準より下回った場合，合格の取り消しなどの手段を実施する。

② チュータ制度を設け，入学前と入学後に合格者に相応しいフォローアップを実施する。

③ 入学後となるが，研究室の早期配属（例えば１年次から）を実施し，担任教員に責任を持たせて学業を成し遂げさせる。

④ 本学の自主研究制度を活用して，ＡＯ入試合格者が参加することを義務付ける。

（3）「見えない」から「見える」へ

ＡＯ入試は大学側だけでなく高校側，高校生側にとっても選択の一つであることから，ＡＯ入試のアドミッション・ポリシーを公表するだけで十分に情報が伝わっているとはいえない。そのために大学のホームページに新たにＡＯ入試のプラットホームを用意し，大

学側と高校生と直接対話できる環境を整える必要がある。そのために以下の活動を行う。

① ＡＯ入試のホームページを新設し，情報公開を進める。さらに，定期的にメンテナンスを行い，新しい情報を更新していく。

② ＡＯ入試関連の掲示板を設け，高校生と対話する仕組みを構築することから，高校生が本学に対する希望、要求、疑問などを即座に対応する。

③ 学校独自の学力テストをオンラインで実施することができ，ＡＯ入試合格者の学力を把握することが可能となる。

５．おわりに

ＡＯ入試制度は新しい人材確保手段を提供した反面，大学の入試制度と教育方法に多くの課題をもたらしている。大学側にとってＡＯ入試合格者を４年間の大学教育を経て優秀な成績で卒業させるという目標を達成するために，入学後のフォローアップ体制を完備することが重要である。これより重要なのはＡＯ入試アドミッション・ポリシーに相応しい学生をいかに見つけて入学させるかということである。そのために大学のＡＯ入試制度についての検討を定期的に行う必要があるし，また高校とのパイプを太くして優秀な高校生の情報をキャッチすることも大事である。さらにインターネット上で高校生と対話する仕組みを構築して不特定多数の生徒と会話することで選択範囲を広げることも考えられる方策である。

参考文献

阿部 和厚，小笠原 正明，西森 敏之，細川 敏幸，細川 真澄男，加茂 直樹，脇田 稔，眞嶋 二郎，赤司 道和，佐藤 公治，早川 豊，長谷部 清，佐々木 陽一，宇野 豊，小川 悟，1999，「北海道大学における 21 世紀の入学者選抜－アドミッションズ・オフィス方式の導入について－」『高等教育ジャーナル―高等教育と生涯学習―』6:91-112.

菊地賢一，2006，「入試区分別の受験者の学力推移と学内成績の追跡調査に関する考察」『大学入試研究ジャーナル』16:59-64.

倉元直樹，奥野攻，2006，「追跡調査の技術論的検討―東北大学歯学部の事例」『大学入試研究ジャーナル』16：21-29.

中村肖三，福島真司，2006，「進化するＡＯ入試－“青い鳥”を求めて－」『大学入試研究ジャーナル』16：83-88.

福島真司，2006，「ＡＯ入試の評価について－鳥取大学ＡＯ入試に関する諸調査結果から－」『大学入試研究ジャーナル』16：89-97.

福島真司，2007，「ＡＯ入学者の視点－入学後ＡＯ入学者全員面接調査から－」『大学入試研究ジャーナル』17：23-31.

河野勝泰，2006，「真の意味のＡＯ入試の実現に向けて－福島論文へのコメント－」『大学入試研究ジャーナル』 16:99-100.

大作勝，南部広孝，2007，「長崎大学のＡＯ入試 5 年間を総括する」『大学入試研究ジャーナル』17：33-38.

藤原康宏，2007，「岩手県立大学ＡＯ入試合格者の追跡調査」 『大学入試研究ジャーナル』17：111-116.

Kei―Net（河合塾の大学入試情報サイト），2007，「ＡＯ入試－大学入試の新たな可能性を探る－」『http://www.keinet.ne.jp/keinet/doc/keinet/jyohoshi/gl/toku9907/News9907.html』

望月由起，2007，「横浜国立大学教育人間科学部ＡＯ入試受験予定者の特性分析」『全国大学入学者選抜研究連絡協議会第２回大会研究発表予稿集』37-42.

池田文人，鈴木誠，加茂直樹，2007，「ＡＯ入学者の追跡調査結果に基づくＡＯ入試の評価―平成 13 年度北海道大学薬学部入学者を対象にして―」『大学入試研究ジャーナル』17：51-55.

島田康行，2007，「ＡＯ入試‘志願理由書’の研究―何がどう書かれたか―」『全国大学入学者選抜研究連絡協議会第２回大会研究発表予稿集』43-49.